2012 年度 修了

教室における教師の「困った」を生徒の「学び」へつなげていく
― 「現代社会」を教える非常勤講師のエピソード記述からの考察 ―

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
家族機能・社会臨床クラスター
三井　若奈

この研究は、筆者が高校で「現代社会」を教える非常勤講師として、担当クラスの生徒と出会ったところから始まる。自分の言葉が伝わらないと感じることが多く、授業での生徒たちとのやりとりは、筆者にとって「困った」があふれる時間だった。そのような中でも、教師として生徒と向き合い続けた。１年間の経験を振り返り、生徒たちのことをもっと豊かに了解することで、そこから見えてくる生徒の姿と教師の役割、学校で学ぶ意味について明らかにする。

Ⅰでは､教室で出会った生徒たちを理解する上で､教室にいる生徒が置かれている現状、筆者が生徒を見ている立場について述べる。さらに、筆者がエピソード分析をするきっかけとなった教師として教室内の観察を積み重ね、生徒を理解しようとしたジョン・ホルト氏の研究態度を紹介する。教室内での観察を本研究では､「エピソード記述」を用いて描き出す。エピソード記述とは、客観的な実践記録とは異なり、研究者が１人の主体として生徒と関わり、事実としての出来事だけでなく、自分の心が動いた様子を描くものである。

Ⅱでは、教師が授業で「困った」と感じた場面から、筆者が教えている生徒はどんな生徒なのかを記述する。そこから、教師の感じる「困った」の向こう側に、生徒の抱える「わからない」の世界があることが明らかになった。Ⅲでは、その生徒の抱えている「わからない」の世界に授業を通して、教師がどのように関わったのかを記述する。ⅡとⅢはそれぞれ具体的なエピソードを紹介しながら、そのエピソードごとに考察を行う。

Ⅳでは、ⅡとⅢでエピソードから導き出した各論を総括する考察を行う。エピソードごとの考察から、多くの生徒が教師に気にかけたり、認めたりしてほしいことが明らかになった。高校には、様々な教科があり、そこで行われている日常の細かいやりとりが大切である。その関わりの中で生徒は教師から認めてもらうことができる。また、教室での学びと生徒の生活を結びつけることで、生徒は自分の置かれている状況や身の回りのことに気が付いていく。さらに、教室で生徒たちは教科を学びながら、教師やクラスメイトから学び方自体も学んでいる。受験のために多くの学びが手段として使われる中、本来の「学び」に立ち返る機会が、筆者の担当したクラスにはあったと思われる。この研究は、教師の「困った」を生徒の「学び」へつなげていくことができ、その「学び」は学校で学ぶ意味を示唆している。